

「ルソーとロマン主義」なるもの：文化的取り込みに抗して

阿尾, 安泰
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5518>

出版情報：言語文化論究. 18, pp.1-11, 2003-06-25. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

「ルソーとロマン主義」なるもの

— 文化的取り込みに抗して —

阿 尾 安 泰

はじめに

ルソーとロマン主義という結びつきは何の疑問も引き起こさないように見える。実際その組み合わせは、様々な論点の展開を可能にしてくれるようにも思われる。たとえば、両者をつなぐキーワードにしても見つけるのは、それほど難しいことではない。「自然」という概念をめぐる、作業は順調に進行していくようだ。

ただ、ここでは合致の申し分のなさにむしろこだわってみたい。連続性ゆえに18世紀と19世紀をへだてる距離が忘却される恐れのためである。確かに時間的に、18世紀から19世紀に至る流れは、近代化のプロセスとして理解され、何の断絶もないかのように語られることがある。しかし、それはあまりに両者の置かれたコンテクストを無視することではないだろうか。先ほどみた「自然」という言葉にしても、同じ語が異なるコンテクストにおいて、別々の機能を果たした可能性があるかもしれない。言い換えれば、解釈を均質化することで、作品が持つ独自性が見落とされる危険が存在するのである。

我々が行おうとするのはこれまで類似性からのアプローチが主であり、連続性は問い返されることが少なかった傾向に抗して、ルソーとロマン主義を隔てる距離を測定しようということである。そして差異に注目することで、ルソーを新たに読み込んでいく可能性を確保するとともに、近代化のプロセスからずれるものとして、ルソーの作品を提示し、現代にまで及ぶ歩みを批判する契機を見いだそうとするものである。

1. スパースターと異邦人

ルソーの持つ偏差を見極めようとする我々の前に現れるのは、この18世紀の思想家に対する多くの讃歌である。実際19世紀においては、ルソーに対する呼びかけが至るところでこだましている。たとえば、バイロンのオマージュがある。

なぜならば、彼こそは靈感をうけた人、
デルフォイの神秘の洞窟の奥から響き渡ってきたかのように、
彼の口をついて出てきたのは、世界を燃えあがらせるあの神託だった。
その神託は、王国がなくなるまで燃え続けて、やむこともない。
彼はそれを、フランスのために伝えたのではなかったか。
生まれながら、積年の圧政に頭を垂れ、打ちのめされ、打ち震えていたフランス。

だがルソーとその仲間の声にうながされて、怒りに立ちあがるフランス、そのほどばしる怒りは、これまで積もりに積もってきた恐怖心にとって代わるのだろうか⁽¹⁾。

ヘルダーリンもこうした動きに呼応している。彼はルソーに呼びかける。

われらの昼の時はなんと短くかざられていることか。
あなたは生きて、見て、驚きを感じたのだ。すでに夕べが訪れている、
いまは眠るがいい、かぎりなく遠く、
国々の民の歳月が過ぎ去ったのだ。

そしてあまたのひとびとは自分の時代を越えて遠くを眺める
彼らは神によってはるかなところを示されるのだが、あなたはあこがれながら
岸辺に立っていて、あなたの同胞にはいまわしい者、
影と思われているし、あなたも決して彼らを愛しはしない。

あなたが名をあげた者たち、約束された者たち、
その新しい者たちはどこにいるのか？その友の手で
あなたは温められるのに。いつかあなたの孤独な言葉が
聞き取られるようになるために、彼らはどこで近づいて来るのか⁽²⁾？

こうした作家たちのルソーに対する意識は明確であり、この孤独な作家を起点として自己の位置づけを行おうとしている。定点、基準点としてのルソーをグロリシャルは次のように規定する。

あともう少し経てば、彼（＝ルソー）自らが、供として感じやすい魂、美しい心を持つ人々、豊かな胸の母たち、誇り高き共和主義者たちを引き連れて、終わりゆく世紀とこれから始まろうとする世紀の蒼穹に宵の明星、暁の明星として、偉大な革命ショーのスーパースターとして、輝くことだろう⁽³⁾。

グロリシャルのこうした見解が読む方に若干の距離感を覚えさせるのも、彼がそれまでに行ってきた読解のためである。そこではある転倒が問題になるからである。論文の中で試みられたのは、いかにルソーが自己の本来あるべき場所を求めてさまよったかを、周到な分析を通して示すことであった。そうした彷徨を展開したルソーが、彼に続く世代からは定点として不動のものであるかのように見なされていく事態が論文の最後で示される。軌跡の連なりがひとつの中心点として認識されようとするプロセスを暗示して、グロリシャルは彼の論を終える。我々がここで企てようとするのは、グロリシャルが分析を終えた時点から始めることである。定点と連続する軌跡を関係づける作業が待っている。ルソーは自己の位置づけを巡って『学問芸術論』および『対話』において興味深いエピソードを引用している。

ここで私は、人々に理解されないのだから異邦人なのだ⁽⁴⁾。

この異邦人とスパルターとの間の関係を考えることからこの論考を始めてみたい。

2. 言語戦略とルソー

ルソーが提示する「異邦人」像にもうすこし拘ってみよう。ここに自己を他者から切り離す契機だけをみてすますことは避けよう。目的が分離の意識だけに尽きるのなら、エピソードを書き付ける必要はなく、ただ皆の前から去っていけばすむことである。そうした文章を書き付け、読ませようとする、その働きかけを通じて交流を図ろうとする他者が存在することを忘れてはならない。この文章は読者に向けてのメッセージであり、自分の声を届かせようとする相手がいるが、言葉が届いていかない。そうした伝達不能をルソーは問題にする。行き詰まり状態を提示することは、それに終わるわけではなく、状況を打開する行為の可能性を暗示する。「異邦人」が存在するとすれば、彼と他者を隔てる距離を明示することで、断絶の克服を目指すのである。ルソーのエクリチュールはそうした行為の可能性を志向している。

ルソーにとって書くという作業は、意味を巡る闘争に他ならない。意味とはただ無媒介的に存在するものではなく、生成され、獲得され、共有されるべきものなのである。ルソーが絶えず自分の居場所を求めてさまよう述べたが、それは彼が意味の生成を求めて著作活動を展開していたからである。確立されるべき価値を目指す行為の軌跡の中で、自分の置かれている状況を提示するとともに、事態を変革していく可能性を志向した。ルソーは静止することができない。彼は自分に寄せられる様々のイメージを前にして、対抗していくことを余儀なくされる。言語を用いて諸解釈を論破することが、彼の書くという行為を支えていく。

解釈をめぐる闘争は決して非現実的なものではない。実際ルソーに対しては、様々な意味づけの試みが行われてきた。特に明らかなものとしては、彼の独自性を切りつめようとするものがある。つまり、ルソーは口では新しいことを述べているようだが、その本質的な部分は一般的な立場とあまり変わるところがないというのである。思想の革新性を形式面での、悪しきレトリックの過剰さということにすり替えてしまう。たとえば、『ダランベール氏への手紙』に対するグリムの判断を見てみよう。

(・・・) ルソー氏は生まれつき詭弁家の才能がある。もっともらしい議論をし、巧みな理論を山と積み上げ、技巧に技巧を凝らしながら、力強く、簡潔で胸を打つ雄弁さをそこに結びつけることで、ルソー氏は彼を攻撃するものにとって実に恐るべき敵となっている。しかしながら、彼がいかに魅惑的に書こうとも、彼が読む者を説得することはない。というのも、人々を納得させるのは真実だけだからである。読者はいつもこう思う。これはとても見事だ、でもとても真実とは思えない。ここで問題となっているルソー氏の作品(=『ダランベール氏への手紙』)(・・・)を読者が喜んで読むことを私は疑うものではないが、読み終えてから、読む前と自分の感情が全然変わっていないことに読者の方は驚くであろう⁽⁵⁾。

ここでは、ルソーの力をレトリック面だけに限定しようとする傾向が明らかである。ルソーの作品の持つ独自性、問題性は抜き取られてしまう。彼の影響力を形式面だけに限ることで、問題提起、現状に対する批判は人々の理解の地平から消えてしまう。ルソーが示そうとする批判的な異質性は、形式的な差異というフィルターにより濾過され、本質的には凡庸な作家として、ルソーは文化的な枠組みの中に取り込まれようとするのである。そうした取り込みの過程に意識的であったルソーは、人々が提示するルソー像に対して、自ら絶えず異質性を新たに示して、取り込み得ぬ独自性を対抗させていく必要に迫られた。

そうしたルソーの生き方は人々を苛立たせる。ルソーの行動に今度は仮面という枠組みが課せられる。ヴォルテールはマルモンテルと会話をしながら、首尾一貫したルソー像のことを語る。

(・・・) そうだろう。この男(＝ルソー)は頭のとっぺんからつま先まで、嘘で固まっているのだ。心も精神もそうだ。いくらストア派や犬儒派を気取っても無駄なことだ。すぐに化けの皮がはがれ、偽りの仮面で息が詰まってしまうだろう⁶⁾。

つまりルソーの行動は偽りのものであり、仮面をはげば、現れる素顔は他の人々と変わらないという図式である。ルソーは変わり者に見えるが、それは形だけのこととされる。こうしてルソーの著作と彼の行動は、その奇矯さが表面的なもの、形式的なものとなることで、人々の間に無害なものとして取り込まれようとする。ルソーと人々を隔てる境界線はかりそめのもの、その差異は2次的なものとなされ、根本的均質性、同質性が確保されたように見える。

ルソーの側からすれば、こうした取り込みを意識化したうえで、新たな図式を提示する必要があった。彼が定點たり得ず、絶えず動きながら、自らの場所を求めていったのにはそうした背景が存在したのである。相手が与えようとする意味づけに対して、別の意味生成を対峙させねばならなかった。言葉にははじめから意味があるわけではない。意味を巡る闘争の中から、そこに価値が付与されていく。言語戦略の問題を考えようとする時、そうした活動が展開する領域を考えることが求められるであろう。

3. 「自然」という罫・「人間」という発明

言葉の価値が、それが占める場の条件によって決定されることが確認される時、言葉を巡る問いかけは、その解釈を通じて明らかになる意味形成領域の構造を分析することになる。キーワードを選択して、読解における差異に注目しながら、場の姿を明らかにするのである。場はあたかも透明性を装い、その存在は場に置いて姿を表している語句を通してしか分析の射程に入ることではない。ここでは、具体的に「自然」、「人間」というふたつの言葉に拘ってみよう。

3-1: 「自然」

「自然」という言葉については、迷いがないように思えるし、この言葉こそ、ルソーと

その後のロマン派の詩人たちをつなぐ重要な概念とされている。それこそ詩人の精神が向かうべき、創作における特権的なフィールドとされている。ただここにおいては、ある種のずれに注目しながら考えてみたい。特に18世紀においては、nature は一般的に「自然」と「人間の本性」の双方を含みこんだものとして流通する⁽⁷⁾。そしてこの関係が当時の知的枠組みにとって重要であることはすでにフーコーが『言葉と物』の中で指摘していた。

古典主義時代の《エピステーメー》において、「自然」の諸機能と「人間の本性」の諸機能が各項ごとに互いに対立していることに留意しなければならない。(・・・) こうした対立関係にもかかわらず、というよりむしろ、こうした対立関係をつらぬいて、自然と人間の本性との積極的關係が素描されるのが見うけられるであろう。じじつ、両者はいずれも同一の諸要素(・・・)を用いて作用するのである(・・・)。言説はこうして人間の本性を自然と結びつけるのだ。逆にいえば、諸存在の鎖は、自然の働きによって人間の本性に結びつけられていく⁽⁸⁾。

ここでは、自然と人間が表象という解釈システムのもとで、相補的な関係にあるとともに、機能面では相同的な領野として捉えられている。相似的な空間として、ふたつの領域が18世紀の言語文化の場を支えている。実際人間の本性を巡る探求は原初的な人々の形成する社会の問いかけや言語のありようを考える中で18世紀的な知を蓄積していくが、その構成の仕方は人間を取り巻く事象を分類し記述していく「博物学」の歩みと並行しているのである。どちらも知の一覧表を形成することを大きな目的としており、目にする対象を知的な秩序の枠組みの順列の中に記載し、位置を確定していくと言う意味では空間的な思考装置に基盤を置いている。

このふたつの領域の空間的相同性における出会いを鮮やかに示す好例としては、たとえばルソーの『孤独な散歩者の夢想』の中の一節が挙げられるだろう。この部分は湖水を見るルソーと自然との合一感を語る場面として、語られることが多い。

しかし魂が十分に強固な地盤をみいだして、そこにすっかり安住し、そこに自らの全存在を集中して、過去を呼び起こす必要もなく未来を思いわずらう必要もないような状態、時間は魂にとってなんの意識ももたないような状態、いつまでも現在がつづき、しかもその持続を感じさせず、継起のあとかたもなく、欠乏や享有の、快樂や苦痛の、願望や恐怖のいかなる感情もなく、ただわたしたちが現存するという感情だけがあって、この感情だけで魂の全体を満たすことができる、こういう状態があるとすれば、この状態がつづくかぎり、そこにある人は幸福な人と呼ぶことができよう。(・・・) 魂のいっさいの空虚を埋めつくして、もはや満たすべきなものも感じさせないのである。こうした状態こそ私がサン・ピエール島において、(・・・) 孤独な夢想にふけりながら、しばしば経験した状態なのである⁽⁹⁾。

この箇所こそ、後のロマン派の詩人たちの多くが自分たちのルソーとの同族性を示す証拠としてあげるものに他ならない。しかし、そこで立ち止まろう。我々にとって重要なことは、「自然」という言葉がはらむ18世紀と19世紀とのずれを手がかりとして、ルソーと

ロマン主義の間に境界線を引くことであった。ここでも自然との一体感という言葉に欺かれないようにしよう。18世紀的な枠組みにおいて自然と人間とが対応することはこれまで見たように、ある意味で決して唐突なことではない。相同的な空間なのである。むしろその位相の違いを前提にした上で、断絶ゆえに交流が大きいことを強調するのが、19世紀以降の近代的な見方なのである。

もう一度ルソーの文章に戻ってみよう。そこではひとつの存在が、自然と呼応しあう姿が描かれている。そして個たる存在が交感によって全体と合致しようとする。この対応はあまりに直接的であるが、その連結を支えるのが、自然と人間の本性が対応し合う「古典主義のエピステーメ」であろう。一項から他方への変換（1から全体への移行）はそうした装置があればこそ円滑に運ぶと思われる。もしルソーに新しい所があるとすれば、移行変換の過程を書き付けるという行為の意味に、そうした活動がもたらすものに注目したことである。図式にそって動くことは誰もが行うことであるが、その動き自体を記述しようというのは別のレベルに属することである。

ただ、ここまでの所では、ロマン主義とルソーを分かちものが鮮明とは言い難い。そこでもうひとつのキーワードに向かうことが必要となる。それが「人間」あるいは近代的主体の誕生である。

3-2: 「人間」、近代的主体の誕生

3-2-1: 関係の変容

ここでもう一度自然との呼応関係を考えてみよう。問題となるのは、直接的相同関係から抽象的位相関係への移行とも言える。箱同士を重ね合わせながら、完全に重なるか、含まれるかといった包含関係および合同関係に基づいて考えるのが前者である。そこには両者のあいだの距離を測る原理的な連続性があると思われる。秩序は同じレベルに属している。後者はもう少し別のレベルでの関係を想定する。たとえば、指紋による本人の同一の確認などが挙げられる。指紋は別にその人の人格を表わすわけではない。指紋には同じ物が存在しないという前提の下に、指紋と特定の人物とが対応させられるのである。何らかの前提を想定し、違う秩序に属するかに思える2項が、結びつくのである。レベルを調節し、関連づける抽象化作用を考察してみよう。フーコーは、こうした認識の位相に現代性を見ようとする。

(・・・) 私は、現代性を、歴史の一時期というよりは、むしろ一つの〈態度〉として考えることができないだろうかと考えるのだ。態度という語によって、私が意味するのは、現在の現実に対する関わり方の様式のことなのだ⁽¹⁰⁾。

問題なのは、昔と比べての今のことではない。昔とくらべて見えてくる現在とともに重要なのは、昔と今とを比べるという姿勢そのものを問い返そうとする問題意識に現代性を読み取るということだ。こうした再帰的な視線を抜きにしては、近代以降の認識の持つ意味は見えてこないだろう。先に見たルソーの例が直接的な交感を表すとすれば、ロマン派の方は、そうした両者の交流を見るもう一つ別の視点を感じさせるのである。たとえば、

そこには「超越」という審級が導入される。

ようこそ、春の寵児よ！
 今でも君は、僕にとって
 鳥ではなく、目に見えぬ存在、
 声だけの、神秘的な存在なのだ⁽¹¹⁾。

鳥を現実のものではなく、神秘的・超自然的な存在への変貌せしむる視線がここにはある。自然はそのままであるのではない。「超越」した存在と化すことで、見るものに応える。その変貌の過程の必要性、また過程を見守る存在を必要とする。そうした視線なくしては、この関係は力を失うことであろう。ここに特権的視点としての近代的主体が登場する。

3-2-2：主体という場

この主体は交流の過程を見守るものという再帰的な位置を占めるとともに、ある特性を示す。交流を支える特権的部位として「心」を想定することである。「心」において、内面においてこそ自然との一体性が十全な形を取るということである。これは決して過小評価されるべきことではないし、また表面的な類似にもかかわらず、前代と変わらないものでもない。それは「内部」という位相が決して個別に作成されたものではなく、「外部」の創出と相関関係にあるからである。

近代において現れる心理的な審級としての「内部」は単独の存在ではない。では「外部」とは何か。「内部」は純粋性を保つために、それを脅かす存在としての「外部」を必要とするのである。近代において現れる「大衆」の存在を忘れてはならない。民衆、大衆という姿形のはっきりしない不特定の塊が近代において出現する。近代社会が生み出した無産階層と切り離して、近代文学の姿を考えることはできない。逆に言えば、外にこうした多数者集団を想定してこそ、特権的主体としての近代的個人なるものを考えることができたのである。ロマン派の自然に向かう視線はその対抗力として、自分を取り囲む不特定者との距離を意識する必要があった。その人々を取り込むにしろ、また退けるにしろ、彼らと自分たちとの距離を意識化することで、創作行為を支えることが可能となったのである⁽¹²⁾。そうした意味では、多数者を組織することを目指す国民国家の成立と個人的内面に立脚する近代文学とは呼応関係がある。

近代的主体の場が内部と外部の共犯関係から成立の地平を築く一方で、その運動を記述するものとして、「時間」を持っていくことも強調しておくべきだろう。18世紀が空間の多様性に依拠して、博物学的な知を形成したのに対し、続く世紀はむしろ事象の連続的な記述を目指そうとした。連続的な「時間」指標を想定することで、あらゆる状況を記載することを考えた。こうした空間的に多様な対象は歴史という秩序のもとに配置され、多かれ少なかれ進歩主義的な見方から判断されることになった。なぜこうした時間軸の設定に拘るかといえば、均質な時間の成立を考えなければ、特権的な時間による「語り」の機能を説明しがたいからである。ロマン派の人々が自然との特権的一体感に拘るのは、それ

が日常的な時間との隔絶を意味するからであった。しかし、逆にいえば、その特権性が最高度に達するためには、その対抗たる日常的時間が揺るぎない形で存在することが必要だったのではないだろうか。日常的時間の連続性が確保されていなければ、それを逃れる時間の特権性は希薄なものとなるだろう⁽¹³⁾。

最後にこの近代的主体が生成する場の逆説的な条件に言及しなければならない。それは無の活用ということである。確かにルソーも無のことを語る。

そのような境地にある人はいったいなにを楽しむのか？それは自己の外部にあるなものでもなく、自分自身と自分の存在以外のなものでもない。この状態がつづくかぎり、人はあたかも神のように、自ら充足した状態にある。⁽¹⁴⁾

ただ、この場合の無は、自己の存在とひきかえに全体へとつながることになる。無が全体へと通底する過程にルソーのエクリチュールの力が示されている。2項対立の解消のひとつの方法である。その変換のプロセスはロマン派の場合は少し異なるように思われる。確かにロマン派の枠組みにも、2項対立の図式は事欠かない。内部・外部、日常的時間・非日常的時間など例は少なからず指摘できる。しかし、この対立の処理の仕方はルソーほど直接的ではない。対立を支える基盤の方に、ある揺らぎが導入されている。具体的には、そうした対立を見つめる当事者としての「作者」の中に否定性が刻印されている。ロマン派の作家たちは、多かれ少なかれ、ある種の喪失感を抱いている。自ら書くことの正当性のために、そうした否定性が必須のものであるかに見える⁽¹⁵⁾。

そうした否定性の必要を別の角度から考えてみよう。19世紀以降成立してくる言語文化空間の問題である。文学を巡る場合は、この時代以降、均質さのレベルを高めていく。歴史という規範的な時間軸を設定し、あらゆる事象をこの秩序のもとに納めていこうとする。内部・外部といった対立もこうした安定化と無関係ではない。この対立は事態を混乱させるどころか、その外見にもかかわらずシステムを安定させていく。内部の構造を完全にするために、不純物を外部に投射し、そこに向けて絶えざる運動を展開していく。ある意味で、この方式は秩序と運動の両面からバランスの取れたものとなっている。活動しながら、益々安定感は増していくのである。よくできた独楽のように、早く回れば回るほど倒れにくくなるのである。様々な対立が織りなす揺さぶりは、独楽たるシステムの早さを増すことになっても、それを倒すのではなく、運動をさらに確かなものにしていく。

こうして、均質性の支配する場にひとつの問題が生じる。独楽はいくら早く回転しても安定している以上、静止状態と変わらぬ価値を持つことになる。そこで安定に異議を唱える動きの中から文学運動が展開する。文学に取っての静止状態が怠惰な、安逸な消極的な状態、活力を欠乏した状態を招くという恐れのもとに行動が開始される。ロマン派もその動きの中にある。つまりシステムのバランスを崩すような試みが必要だというわけだ。均質的な場に亀裂を生じさせなければいけない。独楽というシステムが安定しているのなら、その軸にひびを入れることが求められる。そのひびこそ、ロマン派の人々の考えていた否定性という契機ではなかっただろうか。独楽の回転に微妙なずれを生じさせること、そのためにある種の「不在」が志向されたのである⁽¹⁶⁾。対立が対立項として安定してしまえば、力は失われる他はない。連続した空間に特権的な引き裂きの刻印を入れるためには、どう

しても仕掛けが必要となる。ドーナツがドーナツであるために、中心部の空虚が欠かすことができないように、言語文化の場の中に機能をもつ「不在」が要請されることになる。

* * *

これまで我々は、ルソーとロマン主義に関して一般的な語り方とは距離をおく形で、両者を分かちつものに拘りながら読解を進めてきた。類縁関係を強調する議論がともすれば、この2項の表面的な類似関係に目を奪われて、そこにある認識論上の新たな展開を見逃す恐れがあったからである。

こうした方向を正当化する根拠があるとすれば、言語文化活動が単独で存在するものではなく、その場における様々の条件の相互作用のもとに成立するという見解であった。言い換えれば、コンテクスト論を離れた分析作業は基盤を欠くものとなるという意識である。あたかもすべてが連続的に、複雑な相関関係を感じさせずに進行していくように見える中では、成立の過程そのものを問い返す解釈は難しいものとなる。自然との合一を語るルソーとその思想を崇拝するロマン主義者たちの間には道はひとつしかないかと思える。しかし、ルソーの語った「自然」とロマン派たちが語ろうとする「自然」はその外見にかかわらず、微妙にずれている。その偏差に注目するところから、我々の分析は出発した。その距離に注目しなければ、現代にまで至るプロセスの特殊性を理解することはできないだろうと思えたからである。

文化空間の独自性を研究するためには、個々の領域だけの分析では十分とはいえない。というのも、個々の領域自体が、相互的な連関の中で規定し合うからである。そしてその全般的な影響の中で、言葉はその意味、価値を決定していく。こうして作品の探求はそれが置かれた場との関係を巡る中で、ひとつのトポロジーを形成していくことと思われる。この小論もルソーについての場所をめぐる分析の試みに他ならない。

註

- (1) Byron, *Childe Harold's Pilgrimage*, Canto III, LXX I.
- (2) ヘルダーリン、『ルソー』『ヘルダーリン全集』2(「詩」II), 河出書房, 1967年, 14頁。
- (3) Alain Grosrichard, “《Où suis-je?》, 《Que suis-je?》—Réflexion sur la question de la *place* dans l’oeuvre de J.-J. Rousseau, à partir d’un texte des *Rêveries*”, *Rêveries sans fin*, Orléans, Paradigme, 1997, p.46.
- (4) 引用はオヴィディウス『哀詩』からのものである。
- (5) *Correspondance littéraire*, t.IV, Paris, Garnier Frères, 1878, p.54.
- (6) Marmontel, *Mémoires*, Paris, Librairie des Bibliophiles, 3 vol., 1861, t.II, p.190.
- (7) こうした事情はたとえば, Richelet (1759), Féraud (1787) などの辞書の *nature* の項を参照すれば明白である。
- (8) フーコー, 『言葉と物』, 新潮社, 1974年, 328-329頁。更にフーコーは古典主義時代の「自然」について言及しながら, それが19世紀に向かって消滅していくことを述べている。フーコー前掲書, 288頁以降参照。

- (9) ルソー、『孤独な散歩者の夢想』, 岩波文庫, 1960年, 87-88頁。
- (10) 『ミシェル・フーコー思考集成X』 筑摩書房, 2002年, 12頁。
- (11) 池田栄一, 「イエイツとく失意のオード」, 『ロマン派の空間』, 松柏社, 2000年, 220頁。
- (12) 初井貞子, 「'A Poet Speaking to Men'の誕生とワーズワースの平等の意識」, 『ロマン派の空間』, 松柏社, 2000年, 87頁。
- (13) 時枝知富実, 「『序曲』におけるエピファニーをめぐって」, 『ロマン派の空間』, 松柏社, 2000年, 148-151頁。
- (14) ルソー, 『孤独な散歩者の夢想』, 岩波文庫, 1960年, 88頁。
- (15) 池田前掲論文, 224, 241頁参照。
- (16) 後藤美映, 「Poetry of Vulgarity - 旅の風景と空間をめぐるキーツの美学的認識」, 『ロマン派の空間』, 松柏社, 2000年, 192頁。

Rousseau et le romantisme — un essai contre les récupérations culturelles

Yasuyoshi AO

Dans les études rousseauistes, il n'est pas tellement difficile de parler des influences de cet écrivain sur le romantisme. Mais force nous est de constater que se posent de nombreux problèmes compliqués, s'il s'agit de saisir les nuances entre ces deux termes comme Rousseau et le romantisme au-delà des simples comparaisons.

Certes les auteurs romantiques recourent à ce philosophe comme à une idole et à un guide irremplaçable pour leurs activités artistiques. Mais il est important d'indiquer les différences sur le plan épistémologique, qui séparent l'âge classique du XIXe siècle. Malgré des ressemblances superficielles, des mots-clefs comme "nature" ne présentent pas les mêmes valeurs et les mêmes qualités à ces deux époques. L'espace culturel exerce de grandes influences sur les mots qui existent au sein du milieu linguistique et artistique déterminé par les règles épistémologiques. Autrement dit, il s'agit d'étudier les conditions contextuelles qui fondent les oeuvres littéraires.

A partir d'examens qui visent à présenter les caractéristiques rousseauistes, nous avons montré les qualités essentielles du romantisme : la perspective auto-référentielle et la naissance du sujet moderne. Cette perspective ouvre un nouvel horizon sur l'épistémè moderne, alors que le sujet contemporain se base sur une combinaison fort complexe constituée par l'instant intérieur et psychologique, le temps universel et homogène, ainsi que la négativité fonctionnelle. Cette combinaison dynamique ont permis les progrès de la société moderne, occidentale et capitaliste dont l'élargissement et la vitesse on n'avaient jamais été observées dans les époques précédentes.